副助詞タリの用法
A Note on the Japanese Adverbial Particle *Tari*

本　多　　啓

1. はじめに

本稿では、次の例に現れるような副助詞タリの用法を検討する[1)]。

(1) a. 勝ち組オトコはみんな英語力があったりする。　[ある英会話学校の宣伝文句]

b. 上演する地方の方言が入っているとそれだけで親近感が沸いてくるので、無理してなければ結構好きです。でも**名古屋では地元の劇団ほど方言を避けてたりするんですよね**。さみしい限りです。

[演劇に関するブログにおける読者の書き込みから][2)]

c. 複線経路というのは、さまざまな道がある、ということを表す語です。かみ砕いていうと、**人生いろいろでも結果は同じだったりするよ**というモデルです。

(サトウ・渡邊(2005: 221))

d. 今の話、実は全部うそだったりして。

e. 火曜日

特にこの曜日にやることは無いので、主に売り場の手直しなんかをやってます。ポップ見直しとか売り場の什器移動などなど。**客数もわりと少ない曜日だったりする**のでわりとまったり出来る曜日(ただし私は休みが多い)。

[スーパーの店員の日記から][3)]

f. もしかしてご存じだったりしますか？

g. 8月の開催予定や、募集に関して、ご連絡をいただけたりしますか？[4)]

h. わからなくてなんとな[く]勘で書いたら、やっぱり間違ってたりして…

[確定申告の書類の記入についての文章から]

タリの意味・用法について、『大辞林第二版』(三省堂)は、並立助詞タリの項に次のように記述している。

(2) (I) 並行する、あるいは継起する同類の動作や状態を並べあげるのに用いる。普通、「…たり…たり」のように、「たり」を二つ重ねて用いる(時に、末尾の「たり」のあとに「など」を添えていうこともある)。

－　「人が出たり入ったりしている」

－　「本を読んだり手紙を書いたりするひまもない」

－　「大きかったり小さかったりなどして、なかなかからだに合うのがない」

(II) (副助詞的用法)一つの動作や状態を例としてあげ、他に同類の事柄がなおあることを暗示する。

－　「あの子は、親にたてついたりして、ほんとうに困ったものだ」

－　「わたしが人をだましたりなどするものですか」

(III) (終助詞的用法)同じ動作を「…たり…たり」と繰り返してあげ、命令や勧誘の意を表す。

－　「さあ、早く起きたり起きたり」

－　「そこに居てはじゃまだ。どいたりどいたり」

(1)のタリは一見この(II)に該当するかに見えるが、実はそうではない。すなわち(1)のタリは(II)のタリとは異なり、「他に同類の事柄がなおあることを暗示する」ものではない。

たとえば(1a)で念頭に置かれているのは英語力だけであり、ほかの外国語の能力が暗示されているとは解釈しがたい。その証拠に、次の文が意図する内容は、(1a)とは相当に異なる。

(3) 勝ち組オトコはみんな英語力があったり中国語力があったり(スペイン語力があったり…)する。

また、(1c)はある心理学者が書いた文であるが、これに関しては、同じ著者が同じ文献の別のところに、ほぼ同じ内容を別のことばで表現した箇所がある。

(4) しかし、岐路というのはそういう大げさなことを意味しません。**どの道を行っても意外と同じ結果になるものだ**、というような意味です。(サトウ・渡邊(2005: 223))

つまり(1c)のタリは、＜事態が当事者にとって意外と感じられること＞と何らかの形で関連しているわけであり、他に同類の事柄があることを暗示するものではない。

(1)のほかの例についても同様である5)。

本稿は、(1)のようなタリの用法が、『大辞林』に(2)として記述されたようなタリの用法とどのように結びついているかを、認知意味論の立場から考察する。

なお、タリスル全体が文法化して一つの助動詞として確立しつつある可能性、さらにその言いさしの形であるタリシテが終助詞として文法化しつつある可能性もあるが、本稿では(2)から(1)が生まれる動機づけを主題とするため、これらの可能性については論じないことにする。

2. 必然性の欠如

(1)のようなタリの用法を考えるに当たってまず考慮に入れなければならないことは、(2:II)のタリが「述べられた出来事の生起が、当事者の観点から見ると必然性を欠くこと」あるいは「述べられた事態の生起が当事者にとって偶然であること」を表しうるということである。同じ人物の生活についての次の二つの記述を検討されたい。

(5) a. 寝る前にテレビを見たり音楽を聞いたりします。

b. 寝る前に音楽を聞いたりします。

(5b)においては、実行される可能性がある行動としては、明示的に言及された「音楽を聞く」のほかに、明示されないものがある。つまり、このタリは複数の可能性の存在を示唆する。そして(5a)において、「テレビを見る」と「音楽を聞く」を一晩に両方ともするのか、それともある晩にはテレビだけを見て、別の晩には音楽だけを聞くのかについては、どちらもありうる。後者がありうるということは、「音楽を聞く」という行動がある晩に必ず実行されるわけではないということである。つまり、「音楽を聞く」という行動が実行されなければならない、という必然性はないことになる。

(5a)のタリは(2:I)に該当し、(5b)のタリは(2:II)に当たる。(5b)についての議論は(2:II)のタリ全般に成立する。すなわち、このタリが「一つの動作や状態を例としてあげ、他に同類の事柄がなおあることを暗示する」ものであるということは、タリに前接する事態以外にも生起する可能性のある事態が存在するということである。そしてタリが、生起可能な事態が複数存在する中で、ある一つの事態だけに言及するものであるということは、タリに前接する事態は、「この特定の事態が生起しなければならない、という必然性がない」という性格を持っているということである。

タリが必然性の欠如と結びつくことを明らかに示す例を以下に掲げる。

(6) a. 子どもたちが１日、工夫をこらしたへんてこ帽子やへんてこ髪型をして学校へ行く日。コンテストなどがあって、**クラスで一番に選ばれたりする**と、ホームワークパスや何か賞がもらえる。

[「クレイジーハットディまたは、クレイジーヘヤーディ」の解説][6)]

b. **ドクロは場合によって２個でたりする**ので、その際は先にドクロの効果を切らした方が勝ちとなります。 [ゲームの説明][7)]

c. 東京の2月の平均最高気温は10度前後。屋外は寒くても電車は暖房がガンガン効いていて、さらに**満員電車だったりする**と暑くて気分が悪くなってしまうことも。また、試験会場がどのくらい暖かいかわからないし、座る席の位置によっても暖かさが違ってくる。 [「受験旅行を成功させる９のポイント」][8)]

これらのタリはいずれも(2:II)に該当する。しかしそれと同時に、生起する必然性のない事態、あるいは偶然の事態に接続している。

(6a)においては、「クラスで一番に選ばれる」ことは、コンテストの審査基準を考えれば偶然とはいえない、必然性の高いものかもしれない。しかし、選ばれる側の子供たちにとっては、必然とはいえない。タリに前接する「クラスで一番に選ばれる」は、そのような意味で、必然性のないものとして扱われている。同様に、(6b)の「ドクロが２個でる」は、ゲームのプログラムがどのように組まれているにせよ、プレーヤーにとっては偶然の事態であるという扱いを受けている。また、(6c)の見方では、受験で使用する電車が必ず満員電車であるとは限らない。そのような、事態を経験する当事者にとって必然性が欠如する、あるいは生起が偶然であると捉えられる事態に、これらのタリは後接している。

すなわち、(2:II)のタリには、「他に同類の事柄がなおあることを暗示する」という面のほかに、「事態の生起に必然性が欠けている／事態の生起が偶然である」という面がある、ということになる。

3. 主体の認識の仕方としての＜必然性の欠如＞

前節では、タリに＜生起する必然性がない事態＞に伴うことがあるという面があることを見た。その議論において、＜生起の必然性の欠如＞は、述べられる事態の属性(と当事者が捉えるもの)として扱っていた。しかし、ある事態について話し手が述べることができるためには、話し手はその事態を発見ないし認識・概念化しなければならない。その過程を経て初めて、話者は事態について聞き手に述べる、あるいは提示することができる。

そこで、認識の対象としての事態ではなく、認識の主体としての話し手に目を転じると、「話し手が、＜生起する必然性がない事態＞について述べる際にタリを用いる」ということは、「(事態に巻き込まれた当事者だけでなく)話し手自身が、＜生起の必然性がない＞**と認識した**ときに、タリをつける」という可能性を生み出すことが分かる。

この、「話し手がある事態を、＜生起の必然性がない＞と認識したことを示す」が、(1)で用いられたタリの第一の意味ないし用法である。

話し手によって＜生起の必然性がない＞ものとして認識されやすいものの一つとして、話者の＜確信がもてないこと＞あるいは＜思いつき＞がある。そこで、＜確信がもてないこと＞や＜思いつき＞にタリが後続する可能性が生まれる。

(7) a. デスチャ７年、キャンディーズ５年、**浅田真央ちゃんが４年後スケート辞めてたりして**[9)]

b. Lychee Tea、Mango Tea
ポッカのライチ・ティー、とマンゴー・ティー。これっ、どちらもなかなかいけます。日本でもヒットするんじゃぁないかな。(**もう売ってたりして！**)
[シンガポール在住者のサイト。2000年5月20日付けの記事。][10)]

また、必然性が欠如しているということは、見方を変えれば、可能性が存在するということである。そこで次の例のように、生起の可能性が感じられる事態にタリが後接することが可能になる。

(8) 普段何気なく通り過ぎてる場所でも、図書館とかでよくよく調べてみると**意外な有名人がやって来てたりする**んだよ♪[11)]

＜確信がもてないこと＞＜思いつき＞＜可能性が感じられる事態＞は非現実ないし未実現の事態である。非現実・未実現であれば「生起の必然性がない」と認識されることは自然であろうが、すでに現実に起こった事態であっても、そのように認識されることがある。その一つの例は、話し手にとって「意外」と感じられる事態である。ここから、タリが「意外」と感じられる事態に接続する可能性が生まれる。その例が、本稿の冒頭でも言及した下記の例である。

(1) b. 上演する地方の方言が入っているとそれだけで親近感が沸いてくるので、無理してなければ結構好きです。でも**名古屋では地元の劇団ほど方言を避けてたりするんですよね**。さみしい限りです。　[演劇における方言の使用について]

c. 複線経路というのは、さまざまな道がある、ということを表す語です。かみ砕いていうと、**人生いろいろでも結果は同じだったりするよ**というモデルです。

(1b)は、「地元の劇団であれば方言による演劇を上演する可能性が高い」という予想に反するという点で、予想外ないし意外な事態を述べている。(1c)のタリが意外感と結びつくことは、本稿冒頭で述べたとおりである。

類例を挙げておく。

(9) オンゲーやってるわりに、他者との接触を避けてたりするんよね、俺……[12)]

このタリは、「オンラインゲームで他者と対戦することを好む人であれば、ゲームを通じて他者と接触することを好むだろう」という期待に反する、その意味で意外と感じられうる事態に後続している。

話し手にとって不都合と感じられる事態、受け入れるのに抵抗感を感じる事態も、「生起の必然性がない」と捉えられやすいものである。

(10) で、今日は晴れてお休みです　でも、今日、起きたら家事が山のように待っていてくれるので、それを仕上げたいと思います　だって、**家事を済ませないと、明日から着ていく服がなかったりするんだもの**(苦笑)。[13)]

なお、このようなタリは、(2:II)のタリのもつ二つの側面のうち、「事態の生起に必然性が欠けている／事態の生起が偶然である」の面に依存して成立している。もう一方の「他に同類の事柄がなおあることを暗示する」の面はこの用法においては消えている。

ここで蛇足ながら補足しておくと、本稿はタリがその「意味」あるいは「用法」として、「確信がもてない」「思いつき」「可能性」「意外感(あるいは意外性)」「不都合・受け入れ困難と感じられる」を表すと主張しているわけではない。ここでタリの意味・用法として提案しているのは、繰り返しになるが次の一つである。

(11) タリは、話し手がある事態を、＜生起の必然性がない＞と認識したことを示す。

「確信が持てない事態」「思いつき」「生起の可能性があると感じられる事態」「意外と感じられる事態」「不都合・受け入れ困難と感じられる事態」は、「生起の必然性がない」と認識されやすい事態の例ではあるが、タリそれ自体が直接これらの概念を表すわけではない[14)]。これはたとえば、「人間」という語には(少なくとも)＜男性＞と＜女性＞が該当するが、だからと言って＜男性＞＜女性＞が「人間」という語の2つの語義であると考えることはできない」ということと並行している[15)]。

4. 緩衝効果

聞き手にとって(意外である、あるいは不愉快であるなどのように)受け入れがたいと予想される事態について述べる際には、その事態を「ただの思いつき」のような、**生起する必然性がないものとあえて認識して提示する**ことが、相手のショックや不愉快さを軽減する一つの手立てとなりうると考えられる。そこで、聞き手が受け入れに抵抗を感じると予想されること、あるいは、そのような聞き手の反応を予想する話し手にとっては言いづらいことを提示する際に、タリを用いるとやや控えめな印象を生み出すことになる。

そこで、(1)で用いられたタリの第二の意味・用法として、(12)を設定することができる。

(12) タリは、話し手がある事態を＜生起の必然性がない＞とあえて認識して、聞き手に提示していることを示す。

その効果として、聞き手に対する提示の仕方が丁寧ないし控えめになり、場合によってはためらいがちで自信がないものになる。

その一つの例が、冒頭にも掲げた次の例である。

(1d) 今の話、実は全部うそだったりして。

この文は、「今の話が実は全部うそである」ということに関して話し手が確信を持っていない場合であっても、逆にそれを事実と認識している場合であっても、使うことができる。前者の場合には思いつきをそのまま素直に必然性なきものとして認識して提示しているのに対して、後者の場合には事実であることをあえて必然性のないこととして認識して提示している。そのように提示することによって、聞き手に与えるショックを和らげる緩衝効果が生まれるわけである[16)]。

相手が気づいていない、あるいは知らないと思われることを提示して注意を向けさせるときにこのタリを用いると、提示の仕方がやわらかな、ないし控えめなものになる効果を持つ。

(13) a. 勝ち組オトコはみんな英語力があったりする。　(＝(1a))

b. 火曜日
特にこの曜日にやることは無いので、主に売り場の手直しなんかをやってます。ポップ見直しとか売り場の什器移動などなど。**客数もわりと少ない曜日だったりする**のでわりとまったり出来る曜日（ただし私は休みが多い）。
(＝(1e))

c. ラブちゃん今日は初トリミングでした
いつもあたしかパパがカットしたりしてるんですよ(笑)
全然関係ないけど、**こう見えても美容師免許持ってたりする**(人間のね)
[ペットとの関連で、ブログの書き手自身についての情報を提示][17)]

自分の失敗など、あからさまに語ることが話し手自身にとって苦痛や抵抗を感じさせるようなことを伝える場合には、タリの使用がある種のためらいや自信のなさを感じさせるものとなる。

(1h) わからなくてなんとな[く]勘で書いたら、やっぱり間違ってたりして…

[確定申告の書類の記入についての文章から][18)]

「嬉しかったりする」「つらかったりする」のように、率直に吐露することに話し手自身が抵抗を感じる可能性が高い、内心の気持ちをやや控えめに提示する際にも、タリが用いられることがある。

また、事態をただの思いつきのような、生起の必然性のないものとして認識・提示することは、その事態が現実に生起しても、あるいは逆に生起しなかったとしても、特に大きな影響を持たない、あるいは誰にも何の落ち度もないと捉えていることを示す効果を持つ。このことから、質問や依頼の際にタリを用いることで、「丁寧」「控えめ」「話者が事態を重要視していない、深刻に捉えていない、軽い」などの印象を与えることができる。

(1) f. もしかしてご存じだったりしますか？

g. 8月の開催予定や、募集に関して、ご連絡をいただけたりしますか？

5. まとめと理論的な意味合い

5.1 一人称的な分析

以上の議論をまとめると、(1)のようなタリの用法の成立は、次の経路によることになる。

(14) (2:II) のタリがもつ、「他に同類の事柄がなおあることを暗示する」「事態の生起に必然性が欠けている／事態の生起が偶然である」という2つの面のうち、後者を出発点とする。

a. 事態生起の必然性の欠如

→ 話し手の側での、＜生起の必然性がない事態＞としての認識:

- 確信が持てない事態
- 思いつき
- 生起の可能性があると感じられる事態
- 意外と感じられる事態
- 不都合・受け入れ困難と感じられる事態
- (その他)

b. 事態生起の必然性の欠如

→話し手の側での、＜生起の必然性がない事態＞としての認識・提示:

・緩衝効果

出発点となるのは＜事態生起の必然性の欠如＞である。(1)の用法においては、＜同類の事柄に対する暗示＞の面は消えている[19)]。

もっとも、＜事態生起の必然性の欠如＞は出発点としては重要であるが、本稿では、その後の展開を引き起こしたのは、＜話し手の側での、＜生起の必然性がない事態＞としての認識＞であると考えている。＜事態生起の必然性の欠如＞は、(話し手によって認識されたかぎりにおいての必然性の欠如、という意味において主体の関与はあるものの)それ自体は認識の主体のあり方ではなく、対象の属性である。それに対して、＜話し手の側での、＜生起の必然性がない事態＞としての認識＞は、主体の認識のあり方を直接に問題にする議論である。すなわち、すでに述べたように本稿においては、言語表現の意味の基盤を認識の対象としての事態の属性ではなく、主体としての話し手の認識のあり方それ自体に求めているわけである。そしてこれが多義性の一つの根拠となると考えているわけである。

現在の認知意味論では、認識の対象のレベルでの多義表現の意味のつながりは、その重要性が広く認められていると言えるが、本稿で重視しているような、主体による認識のレベルでのつながりは、その重要性が十分に自覚的に認められているとは言いがたい。Langacker (1998)による主体化(subjectification)の議論は概念化の主体による理解のレベルでの語義間のつながりを捉えようとするものと解釈することができるが(本多(2003b))、より自覚的にこの問題に取り組んでいるのは現象学の影響を受けた言語研究である。「主体的立場」(時枝(1941)、本多(2004, 2005))あるいは「一人称的分析」(宇野・池上(2004))と呼ばれる方法論が捉えようとしているのは、言語の意味構造が持つ、まさにこの面である。つまり本稿は、「主体的立場」「一人称的分析」を重視する方法論に則っている。したがって、本稿の議論が妥当であるならば、それはこの方法論の有効性を示すものとなる。

5.2 捉え方の意味論から、見せ方の意味論へ

また、本稿では、「(聞き手に対する)提示」という面を重視してきた。

認知意味論は「理解の意味論」あるいは「捉え方の意味論」とも言われる。すなわち、言語表現の意味を指示対象とみなすのではなく、対象に対する話し手の理解ないし概念化

の仕方(あるいは捉え方)または概念化のプロセスそのもの(conceptualization)と考える立場である。この立場は、次のようにまとめることができる(本多(2005))。

(15) 理解の意味論／捉え方の意味論:
話者(認識・表現者)が、どのような対象をどのように捉えて(construe; あるいは認識して)表現するか。そのような捉え方を背後から支えている認知のメカニズムはどのようなものか。

この考え方は、指示対象意味説を棄却するという点においては支持できるものである。しかしこれに関して、考慮すべき点がある。

理解の意味論は、解釈の仕方次第では、＜概念化の主体＞と＜概念化の対象＞という二項関係のみを視野に入れた意味論ということになる。これは極端な解釈をするならば、コミュニケーションに対する自覚的な考慮を欠いた、独在論的な意味論となりかねないものである[20)]。したがって、この見方を文字通りに取るならば、言語能力がコミュニケーションの能力と密接に関わっているということを理論に取り込むことができなくなるわけである。

「提示」という用語を使うにあたって筆者が念頭においてきたのは、＜話し手＞＜聞き手＞＜認識・提示の対象＞という三項からなる「共同注意(joint attention)」である。本多(2005)でReed (1996)などに基づいて述べたように、言語の基本的な機能は共同注意を成立させることにあると考えられる。すなわち言語には(16a)の機能がある。そしてここに理解の意味論ないし捉え方の意味論の観点を取り入れて太字で示すならば、言語による表現行為の基本的な機能は(16b)にあることになる。

(16) a. 話し手が注意を向けている対象に対して、聞き手に注意を向けさせる

b. 話し手は、自分が注意を向けている対象に対して、**自分がその対象を捉えている**(認識している)**のと同じ捉え方で聞き手が捉える**ようなやり方で、聞き手の注意を向ける

このような言語観を踏まえると、意味論の課題は、「どのような対象をどのように捉えて表現するか」に加えて、「聞き手に対してどのように提示するか」という面を含むことになる[21)]。そのような意味論に対しては、「捉え方の意味論」という呼び方は妥当ではな

い。視覚メタファーを用いて名づければ、「見せ方の意味論」となる。

このような見方では、上記(15)は、次のように改められることになる。

(17) 理解・提示の意味論／見せ方の意味論:
話者(認識・表現者)が、どのような対象をどのように捉えて(construe; あるいは認識して)**聞き手に提示するか**。そのような捉え方を背後から支えている認知のメカニズムはどのようなものか。

ここで、「どのように」は「捉えて」だけでなく、「捉えて聞き手に提示するか」全体にかかる。すなわち、(対象についての)認識と(聞き手に対する)提示は相互に独立したものではなく、緊密に関係しあっている。これは、先に述べた「**自分がその対象を捉えているのと同じ捉え方で聞き手が捉える**ようなやり方で、聞き手の注意を向ける」ということの帰結である。

さらに言えば、理解・認識は提示に一方的に先行するわけではない。再び視覚メタファーを用いて述べるならば、話し手は事態を自分が見たとおりに聞き手に見せるわけであるが、その際、話し手自身の「見方」は、聞き手に対する「見せ方」と完全に独立に、それに一方的に先行して純粋に話し手と対象の関係だけで決まるわけではない。聞き手の存在が、あるいは、聞き手に対する「見せ方」に関わる事情が、話し手の「見方」に影響を与える面がある。「自分がその対象を捉えているのと同じ捉え方で聞き手が捉えるようなやり方で、聞き手の注意を向ける」を達成する際に、聞き手の捉え方にあわせて話し手が自身の捉え方を調整することがありうるわけである。

タリに関して言えば、そのことを示す例に当たるのが、第4節で取り上げた緩衝効果である。たとえば(1e)の「(火曜日は)客数もわりと少ない曜日だったりする」の場合、「火曜日に客数が少ない」という事態は、スーパーマーケットに勤める話し手(書き手)にとっては常態である。話し手自身にとっては「生起の必然性がない」どころかむしろ逆であり、「火曜日に客数が多い」ことの方がかえって生起の必然性が少ない事態であるはずである。しかしここでは、聞き手(読み手)が客数の推移に気づいていない、あるいはそもそも知識を持っていない。そのような聞き手に対する提示の仕方が影響して、話し手は事態に対してあえて「生起の必然性がない」という認識の仕方を選択しているわけである。

あるいは(13c)で話題にされているのはブログの書き手自身の情報であり、当然書き手が熟知している事項である。しかしここでは、書き手についてのくわしい知識を持っていない読み手に対する提示の仕方が影響して、書き手はあえて「生起の必然性がない」という認識の仕方を選択している。

先に、「理解の意味論は、**解釈の仕方次第では**、＜概念化の主体＞と＜概念化の対象＞という二項関係のみを視野に入れた意味論ということになる。これは**極端な解釈をするならば**、コミュニケーションに対する自覚的な考慮を欠いた、独在論的な意味論となりかねないものである」と述べた。ここで用いた「解釈の仕方次第では」「極端な解釈をするならば}というヘッジに着目されたい。実は、ここで論じてきたような「見せ方の意味論」に近い考え方が、認知言語学に完全に欠落しているわけではないのである。

Langackerの認知文法(Cognitive Grammar)では、profileはfocus of attentionとされ、そのattentionを向ける主体であるconceptualizerは話し手と聞き手の双方を含むとされている。また、言語活動が行われる場としてのGroundも、話し手だけではなく、聞き手をも含むものである。したがって、Langackerの認知文法には三項関係ないし共同注意を理論に組み込める可能性がある。実際、Taylor(2002：347)は、Groundingの認知的基盤として、視線の共有(“shared gaze”)がある可能性を示唆している[22)]。

しかし、認知文法の枠組みに基づいてなされた具体的な言語表現の研究において、このような三項関係的な問題意識がどれだけ反映されているかについては、疑問の余地がある[23)24)]。

本稿は、本多(2003a,2005)、宇野・池上(2003)、Uno (2006)に引き続き、共同注意ないし三項関係を言語の意味の理論に自覚的に取り入れる試みである。

6 最後に: 英語の*happen*との対比

以上述べたように、(1)に示したようなタリの用法の基盤にあるのは、＜事態生起の必然性の欠如＞である。ところで、英語には、この＜事態生起の必然性の欠如＞の概念を語義の中核に持つ動詞がある。*happen*である。そこで、英語の*happen*にも、日本語タリの(1)のような用法がありうるのではないかという予想ができる。

この予想を検証するうえで参考になるのが、田岡による一連の論考(田岡(2004a,2004b,2005a,2005b))に提示された観察である。

以下、主として田岡によるデータに基いて、タリの用法に並行する*happen*の例を提示しておく。ただし、例文について田岡自身とは異なる解釈をしているところがある。また、日本語訳は本多による試訳である。

(18) 事態経験者にとっての、事態生起の偶然性

Please let us know when he ***happens to*** come into your store.

奴があんたの店にひょっこり顔を出したりしたら、そのときは知らせてください。

(田岡(2005b: 230))

(19)意外感・緩衝効果

a. *Main Street,* which is always put down as my first hook, *happens* to have been my seventh.

... 実は7作目だったりするんです。　(田岡(2005b: 229))

b. As it *happened* there were an extraordinary number of unusual things in the room.　(田岡(2005b: 232))

c. She called Amy to see if she had any idea of her son's whereabouts. *As it happened* Amy had.(*COBUILD*[3] s.v. **happen**)

(You may use **as it happens** in order to introduce a statement, especially one that is rather surprising.(ibid.))

(20)緩衝効果

a. 'Dumbledore *happens* to trust me,' said Snape.

[謙虚な表現](田岡(2005b: 231))

信用してくれてたりするんです。

b. Did you *happen* to pick up those things I asked you to get ?

[話し手の望むこと](Coleman(1975: 84),田岡(2005b: 231))

c. She's the sister of my best friend, who *happens* to be dead.

[ショッキングで相手にとって受け入れがたいこと](田岡(2005b: 234))

... それが実は死んでたりもするんだが。

d. Would you mind turning off the airconditioner ? I *happen* to have a cold.

[相手の気づいていないこと](田岡(2005b: 234))

実は風邪ひいてたりするんで。

(21)緩衝効果

a. Did you *happen* to forget ...?

ひょっとして、…忘れてたりします？

b. Do you *happen to* know his name?
ひょっとしてその人の名前、ご存じだったりしますか？

日本語のタリには「話者が事態を重要視していない、深刻に捉えていない、軽い」という印象を与える効果があったが、*happen*も同様の効果を持つ。たとえばColeman (1975: 84)は(22a)に基づいて、(22b)のように述べている。

(22) a. * I really want to know! Did John *happen to* cash the check?

b. ... *happen* cannot occur when the speaker has a strong interest in the action, as shown by the uncacceptability of [22a], ...

田岡が*happen*の用法として報告するものはここに挙げたものだけではない。また、*happen*のすべての使用例がタリによって自然に翻訳できるわけではない。とくに過去形の*happened*はタリでは表しにくいようであり、ここからタリと*happen*の用法の拡張のあり方の相違をうかがい知ることができる。

しかしながら、2つの言語において意味的に対応し合う形式が、あらゆる場合に相互に翻訳可能ということは、通常はない。タリと同じく＜事態生起の必然性の欠如＞の概念を意味構造に持つ*happen*が、タリと同様の使用範囲の拡張を示していることは、本稿の議論を補強する事実であるとともに、それ自体非常に興味深いものであると言える。

註

1) 本稿の議論はのちに言及する田岡(2004a,2004b,2005a,2005b)に多くを負っている。
2) http://shiokonbu.no-blog.jp/kangekinohibi/2005/03/post_2.html。なお、以下本稿において、インターネットから採取した用例の参照日(確認日)はすべて2006年8月28日である。
3) http://blogs.dion.ne.jp/gokupara/archives/1815945.html
4) http://nvd.typepad.jp/book/2005/06/7_78f7.html#comment-238107
5) なお、『日本国語大辞典第二版』の接続助詞タリの項にも、(1)が該当する語義は記載されていない。
6) http://www6.plala.or.jp/michiT/school_info_etc/01070201.html
7) http://www.jttk.zaq.ne.jp/kuroneko/rule.htm
8) http://passnavi.evidus.com/tokushu/juken_abroad/juken_abroad2005/main.html

9) http://blog.goo.ne.jp/scuderia-f/e/d8c86c082f8ba437240e56cdfe08f821
10) http://www.geocities.jp/raumensyunpou/singapore/anna2000/anna200004.html
11) http://loplos.mo-blog.jp/moge/2004/08/post_5.html#comment-151105
12) http://marmar.at.webry.info/200504/article_1.html
13) http://private.rocketbeach.com/.mms1131/2000oct.html。Googleのキャッシュにて確認。また、印刷の都合上、顔文字を削除した。
14) そもそも、「確信が持てない事態」「思いつき」「生起の可能性があると感じられる事態」「意外と感じられる事態」「不都合・受け入れ困難と感じられる事態」は「生起の必然性がない」と認識されやすい事態を網羅したものではない。また、これらは相互に排他的でもない。たとえば、「思いつき」は同時に「可能性が感じられる事態」でありうるし、また「意外と感じられる事態」は同時に「話し手にとって不都合と感じられる事態」でありうる。
15) この立場については、本多(2001b: 5.5節)もあわせて参照されたい。
16) 話し手自身にとって意外であったり受け入れがたかったりした事態聞き手にとっても意外・受け入れがたい事態である可能性がある。その場合には前節の用法と本節の用法が重なることになる。
17) http://www.mypress.jp/v2_writers/rabu1120/story/?story_id=1193243
18) http://blog.drecom.jp/g-1/daily/200602/26/
19) これは文法化に伴う意味漂白(semantic bleaching)の例と言えるかもしれない。
20) この点に関しては、茂呂(1996)およびそれに対する本多(2001a,2005)のコメントを参照されたい。
21) 認知言語学は意味論と語用論の間に明確な境界線を引ことはできないと考えるが、本稿の議論はその立場をさらに進めて、意味論の守備範囲をより広く考える試みである。
22) Slobinの“Thinking for Speaking”の概念も関連するであろう。また、simulation semanticsは言語理解におけるミラーシステムの役割や、言語とsituated actionの関わりなどに着目しており、三項関係的な問題意識を持っているように思われるが、本稿の議論との関連についてはいまのところ定かではない。
23) 認知文法の枠組みにおける実際の分析においては、conceptualizerやGroundから聞き手を除外して話し手のみを考慮しても、分析の内容に実質的な影響がないことが多いように見受けられる。

24) モダリティ論との関連で言えば、第3節のタリを言表事態めあてのモダリティと関連づけ、第4節のタリを聞き手めあてのモダリティと関連づけることも可能かもしれない。また、前者から後者への拡張をTraugott (1989)の議論に関連づけることも可能かもしれない。

ただし、HopperやTraugottらの理論はコミュニケーションの現場を重視する点では独在論から脱していると言えるが、こちらは話し手と聞き手の二項関係に関心が偏っていて、対象に対する捉え方は二の次になっているような印象を筆者は受ける。

参考文献

Collins COBUILD English Language Dictionary (Third Edition) (2001), HarperCollins Publishers.

Coleman, Linda (1975) "The Case of the Vanishing Presupposition," *BLS* 1, 78 -- 89.

Langacker, Ronald W. (1998) "On Subjectification and Grammaticization," *Discourse and Cognition: Bridging the Gap*, ed. by Koenig, Jean-Pierre, 71 -- 89, CSLI Publications, Stanford.

Reed, Edward S. (1996) *Encountering the World: Toward an Ecological Psychology,* Oxford University Press, Oxford. (細田直哉訳(2000)『アフォーダンスの心理学 --- 生態心理学への道』新曜社).

Taylor, John R. (2002) *Cognitive Grammer*, Oxford University Press, Oxford.

Traugott, Elizabeth Closs (1989) "On the Rise of Epistemic Meanings in English: An Example of Subjectification in Semantic Change," *Language* 65 -- 1, 31 -- 55.

Uno, Ryoko W. (2006) *Detecting and Sharing Perspectives Using Causals: A Case of Japanese Causals*. Doctoral Dissertation, Department of Language and Information Sicences, University of Tokyo.

宇野良子・池上高志(2003)「ジョイント・アテンション／予測と言語志向性を揃えるメカニズム」. 山梨(2003: 231-274).

宇野良子・池上高志(2004)「一人称的説明による理由文の分析」. 日本認知言語学会第5回大会発表.

サトウタツヤ・渡邊芳之(2005)『「モード性格」論 --- 心理学のかしこい使い方』, 紀伊國屋書店.

田岡育恵(2004a)「*Happen*の婉曲効果」.『英語青年』150 -- 2, 112 -- 113.

田岡育恵(2004b)「*Happen*をめぐる意味論・語用論的考察」.『大阪工業大学紀要』49-1,1-12. (http://www.oit.ac.jp/japanese/toshokan/tosho/kiyou/jinshahen/49-1/01_Taokahtm.htm).

田岡育恵(2005a)「*Happen to*不定詞の様々な用法と「必然性の欠如」」.『英語語法文法研究』12, 125 -- 140 (英語語法文法学会).

田岡育恵(2005b)「*Happen to*不定詞のモダリティ」. 成田義光・長谷川存古編,『英語のテンス・アスペクト・モダリティ』, 227 -- 237, 英宝社.

時枝誠記(1941)『國語學原論』, 岩波書店.

本多啓(2001a)「文構築の相互行為性と文法化」. 山梨正明ほか編,『認知言語学論考No. 1』, 143 -- 183, ひつじ書房.

本多啓(2001b)「方言文法と英文法(3) --- 共通語の完了・進行形への展望 --- 」.『駿河台大学論叢』22, 73 -- 93.

本多啓(2003a)「共同注意の統語論」. 山梨(2003: 199-229).

本多啓(2003b)「認知言語学の基本的な考え方」. 辻幸夫編,『認知言語学への招待』, 63 -- 125, 大修館書店 (シリーズ認知言語学入門第1巻).

本多啓(2004)「認知意味論における概念化の主体の位置づけについて」.『日本認知言語学会論文集』4, 129 -- 139.

本多啓(2005)『アフォーダンスの認知意味論 --- 生態心理学から見た文法現象』, 東京大学出版会.

茂呂雄二(1996)「[言語心理学] ことばの「不思議」の究め方」.『別冊宝島279: わかりたいあなたのための心理学・入門』, 59 -- 63, 宝島社.

山梨正明ほか編(2003)『認知言語学論考No. 2』, ひつじ書房.

付記

筆者は2007年3月末をもって駿河台大学を退職・異動することになりました。『駿河台大学論叢』という、制約が少なく、自由に研究活動を展開できる場を提供してくださった駿河台大学教養文化研究所の皆様にお礼申し上げるともに、駿河台大学と教養文化研究所のますますのご発展をお祈りいたします。